



文／藤岡 亜美

2002年明治学院大学卒業。

卒論執筆のためエクアドル、インタグ地区のフニン村での3ヶ月間のフィールドワークを行う。現在㈱ウインドファームスタッフとして、ウインドファーム東京支社(カフェスロー内)で活躍中。

エクアドル インタグコーヒー物語

世界有数の豊かな生態系を育む熱帯霧雲林が広がる南米エクアドル、インタグ地区。木漏れ日に包まれながらコーヒーが成長していく豊かな森での不思議な物語。

インタグ地区

フニン村での

不思議な買い物

その村は、値段の付けられない
ものばかりでできていた。



インタグに広がる豊かな森

わんぱく小僧が私に持つて来てくれた、お菓子の箱の中の蜜餞。餡の包み紙が土に帰らずに残る何百年という重み。病気のおじいちゃんが震える手でサヤから出す、インゲン豆。森に立ち籠める重たい霧のひと粒。毎日4時にきまつて鳥が立ち寄る、背の高い木。水道が枯れた夜、川辺に並んでする歯磨き。そのひとつひとつに、いったいだれが値段をつけられるっていうんだろう。

裏に「In God we trust」(我々は神を信じる)とある、くしやくしやくのドル札を握りしめ、お気に入りのチョコレートを買うに行く。「重要なポイントは、例えばパン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金は、2つの全く異なった種類のお金だという認識です」。ミヒャエルエンデが言い残した一節について考えながら歩いていると、目の前をハチ鳥が横切る。

村で買い物をするとき、買ったものがどこでどんなふうにならされているかを、不思議といつも考えた。例えば、牛の絵のついたホワイトチョココレット。原料のカカオが、どこから来てどんなふうに街の工場に運ばれるのか。結構真剣に、それを想像していた。私たちは価格の先にあるものごとを、見ないように、見ないようにしても、商品を取り引きできる。その先で、何かが破壊されているように、尊敬すべき仕事が必要とされているように。代金を払うことは、責任を払い除ける。この小さな村が、「鉱物」という価格の先にあることだって、誰も想像しなかったようにだ。

フニン村のお店に置いてある帳簿

フニン村では15日に一度、ナランヒージャ、サトウキビ酒などの作物や材木、家畜をトラックに載せて、街へと売りに行く。この「15日に一度」というタイミングがほとんどの村びとにとって、現金を手にする数少ないチャンスだ。換金する産物を持たない家庭にいたっては、その機会はさらにすくない。しかし、米、塩、砂糖、ガスなど、どんな家でも自給できないものが毎日消費されており、村の中心の広場に面して、それらを扱う商店がある。ひとつは15日に一度豚を殺して売るギジェルモさんの店。もう

ひとつは、食材、文房具、衣料などをあつかうポリバルさんの店だ。それぞれの店先には、帳簿が置いてある。買い物をする、店の人が日付と客の名前、品目、値段を記入する。それだけでOK。客は購入した商品を持ち帰ることが出来る。支払いは、たいてい2ヶ月程度まで待つことが出来るという。その間利子は発生しない。支払いが滞った場合は、取り立ての話をしに行くことになっているが、そんなことはめったにない。例えば、肉屋で豚肉を買ったジョアンナが、あとで畑のプラタノ（料理用バナ

ナ）を肉屋の主人に売った場合、帳簿にかかれた肉ひとかたまり分の価格から、プラタノひと頭（と数える）の価格が差し引かれる。ジョアンナが現金で実際に支払うのは、その差額のみでよい。こういったやりとりが繰り返されると、実際に商品が取り引きされる回数よりも、ドル貨幣が使われる回数は、少なくて済む。帳簿にはやけにゼロが多い。これは、小計までスークレで計算されるためだ。スークレは去年廃止された国民通貨。村長はいまだに「俺達の国の通貨がなくなつてたまるか」といつているが、「ジョアンナ、豚肉 24000（スークレ）、ラファエル バター 14000+砂糖 13000、ニコ コーラ 6000」。慣れ親しんだスークレで計算し、買ったものと売ったものを差し引いて、最後に残った分だけ、ドルに換算して支払いをする。安価なものばかりを扱うから、1セントや5セントなど、小さなコインが不足することがある。町ならば銀行に両替に走ることができるが、もちろんこの村に銀行なんてものはない。そこで、おいしい代替通貨。お釣りの小銭が不足すると商品の飴玉で支払う。何枚かのコインと、カラフルなビニールに包ま

れた飴玉が、一緒に手渡される。そして飴玉は、なめればなくなる。よく考えてみると、お釣がないからつて余計に売りつけているだけだ。得しているのはポリバルさんと飴玉メーカー、そして子供たち。まあ、そちらはいいとしても、帳簿を使ったこの買い物の仕組みはすごい。有機的な関係に基づいた、ドル紙幣を介さずにも交換のできるシステムが、物々交換とは別に無意識的に存在している。生活の中で、自給できないものは外部に依存せざるをえない。しかし、必要な物資を手に入れるのに、必ずしも遠くワシントンで発行されたドルを使う必要はないのだ。これは、全世界で注目されている、貨幣のグローバル化に対する抵抗「地域通貨」の取り組みに通じるものだ。しかし、村びとはだれも、「すごいこと」だなんて思つてやしない。それは、「誰がお金持ちになるか」ではなく、「どうすればそれぞれが豊かに生きられるか」という関心に立脚した、単純な生活の工夫だ。支払う現金をいつも持ちあわせ、しかし生産するものはない。そんな私の名前は、ノートに書かれることは一度もなかった。もし書かれていたなら、「アミ



冷蔵庫、といっても、フニン村の家庭には、電化製品としての冷蔵庫は置かれていない。食べ残した食料などは、涼しい場所に置かれる棚のなかで保管される。

チョコラテ 5000」って繰り返しばかりで、ノート一冊分になったかもしれない。夕食がジャガイモのスープの日、チョコレートはかかせなかった。オカワリは我慢して、おやすみ前にロウソクの元ひっそりとかじりつくために。フニン村の日々の献立は、ユカイモ↓ジャガイモ↓バナナ↓マメ↓ユカイモ↓ジャガイモ、の繰り返し。モチモチしたユカイモは何度食べても飽きることがない。しかし、日本でもよく食べるジャガイモは、完全に食べ飽きていた。だから、今日の夕食はどちらのイモかかってことは、私にとって大問題だった。

村の広場を望む高台に位置するレオン・レオニダスの一家。家族は5人。1ヶ月に使う金は50ドルくらい。村ではかなり裕福な方だ。奥さんのロサがつくるジャガイモのスープは家族の大好物。ある日、スープを平らげてしまつてから、「イモに関する大問題」をこの家の食卓にのせてみた。

「ジャガイモとユカイモか。それなら、ジャガイモの方がずっと安いよ。」私は、「好きか嫌いか」という興味を少し延長させてみただけだったのに、レオンは堰をきつたように語りだした。昔は、ジャガイモが麻袋ひとつで30ドルだった話。しかし、今は生産過剰の為、同じひと袋が4ドルにまで暴落していること。逆に、隣の家でとれたユカイモを同じ量買う方が、ずっと高くつくこと。

農業を営む際の一番の悩みの種は、商品作物を外に売りに行く際、市場の価格が大きく変動することだ。「向かい合う畑とは全く別の所で価格は決まり、その変動は家族の暮らしに大きな影響を与える。場合によっては何かを植えるより、それを買う方が効率が良い（コストがからない）くらいだ。そんなの馬鹿らしいさ。」レオンはそう言い切つてから、冷静にこうも言った。「それに、まだここでは『小さい面積で効率的に儲ける』農業技術がない。高い技術があるのは、有機コーヒート、農薬を大量に使用するナランヒージャの栽培だけだ。辺境の村から売りに行くには運送にコストがかつてたでさえ不利なわけで、土地効率の良い栽培でなければやっていけないのさ。それに、もし土地を持っていなければ、一日農業の仕事をして、3ドルにしかない。」ロウソクから垂れる蠟で、3人の子供が遊んでいる。ロサがもう眠そうな顔で私の目を見た。それでも



森のなかで育まれるコーヒー樹

レオンの話は止まらない。

だから、レオニダス家では自分たちで食べるユカやバナナしか植えないことにしたという。「農業は「外の価格」に左右される。そんな農業はやめだ。俺は、この地域のなかで必要とされる、誰も持っていないような技術をみにつけることにした。大工の仕事は、やりながら覚えた。仕事が見つかるかって？ 僕が仕事を求めるのではなく、仕事のほうから僕をさがしてくるよ。」確かに彼はそうとき、近辺の村の家一件、サトウキビを絞る大きな木製の歯車はぐるま、村の中心部に位置するつくりかけの教会の窓、と3つもの仕事を抱えていた。その他にも、ツーリズムの会計係をまかされるなど、人々の信頼は厚い。

ベッドでひとり、チョコレートをかじりながら考えた。「向かい合う畑とは別の所で価格が決まり、それが家族の幸せを決定する」。私はこれまで日本にいて、そのことの意味を切実に問えただろうか。向かい合う畑の仕事と家族の暮らしを思い、疑問や怒りを持たたのだろうか。

エクアドルの新聞の一面には、バナナ、ジャガイモ、石油、鉱物、さまざまな産物の「今日の価格」がずらりと並ん

でいる。政府は石油資源の枯渇にとまなつて、鉱山開発を積極的に進めたいという意向をもっているという。例えば、石油資源が豊富であることを、パンフレットなどで強くPRしてきた在日エクアドル大使館。最近はそのホームページに、現地鉱山省の連絡先を「ビジネスの相手」というタイトルでリンクしている。フニンのような小さな村々に、「値札」を付けるのだ。

レオニダス家をでる日に、私はレオンに手作りの小さなタンスをもらった。こうして値段のつけられないものは、増えてゆく。フニン村がどうして鉱山開発に「NO」といったか、彼に会ってその答えに近づいた気がした。タンスの引き出しのひとつに、いまだに「ドル札がしまつてある。数字で示された、価格の先を想像すること。そこには森があり、川があり、命がたらなっている。」「In good we trust」。神様が居るとしたら、そこには居るだろう。